

「開かれた中国」定着へ

非毛沢東化の新しい展開

中嶋嶺雄

中国では非毛沢東化の深化に伴って、個人崇拜を排し、集団指導制を是とする声が高まっている。「開かれた中国」にあって、この新たな政治的潮流はどのような意義を持ち、どう展開するだろうか。そして毛沢東に対する評価は？

非毛沢東化への不安

中国では現在、「三中全会精神」がしきりに強調されている。「三中全会精神」とはなにか。それはつまり「四つの現代化」を中心に「実践が真理を検証する唯一の基準」だとして非毛沢東化をはかろうとする路線そのものだと言ってもよいであろう。だが、こうした潮流への抵抗も根強く、「毛主席が言ったことはすべて“正しい”」「毛主席が決めた案件はすべて“正しい”」と考える人々が広範に存在していることも、最近の中国の諸論調が明らかにしている。とくに上海のよう

なかつての「四人組」の拠点では、三中全会の方針に反対する者がかなり存在することを彭冲・上海市党第一書記の報告は明らかにしていた（「人民日報」八月四日付）。

政治幻想小説

ところで一方、すでに弾圧され、発刊停止処分を受けたと一部で報じられた北京の反体制誌「北京之春」は依然として健在のようである。去る六月中旬、私自身も北京を訪問した際に、「北京之春」第五号、第六号が出ていることを「民主の壁」に張り出されていた同誌の表紙と目次とで確認することができた。その「北京之春」第五号には、

「二〇〇〇年に起こり得る悲劇」と題した「蘇明」作の「政治幻想小説」が掲載され、たちまちにして売り切れたという。この小説によると、西暦二〇〇〇年には「四人組」が名誉回復され、今日の脱文革の政治情勢が根本的に否定されて中国の政治的舞台は再び暗転するという。

たしかに、昨今の中国の変化は、あまりにも速い。建前としての「毛沢東思想」は依然として堅持されてはいるものの、最近では、文革の犠牲者がほとんどすべて復権したばかりか、五〇年代の毛沢東路線の確立過程で犠牲になった人々、さらにはさかのぼって解放以前の時代に批判された人々も復権しつつある。古くは陳独秀から李立三、張聞天のような革命家への再評価、五〇年代の彭徳懷、丁玲らの名誉回復ないし復活は、もはや「四人組」による犠牲者の復権とは言い難く、いわば毛沢東路線の全面的修正が進みつつあることの証明にほかならない。



確かに毛沢東は偉大な指導者ではあったが…

の「政治幻想小説」は、このような深層心理を突くものでもあったのだ。

このような政治的・社会的心理のなかで、一方では明らかに今日の潮流を「毛沢東思想」への背反として断罪しようとする反潮流も、依然として根強いようである。そうした状況が存在するだけに、最近では、かつて「反党毛主席の大毒草」だと批判された個人崇拜

に求めている。

中国政治の悲劇の根源

こうした中国では、一方で非毛沢東化への不安を内在させながらも、毛沢東家長体制を理論的にも否定しようとしつつあるのだが、こうした方向が依然として個人崇拜と集団指導制という従来からパターン化した座標軸においてのみ追求されているところに今日の中国における「毛沢東批判」の限界があるといわねばならない。なぜなら、こうした次元での論議は、それ自身として当然必要ではあるが、それだけでは、毛沢東家長体制生成の客観的・歴史的根源を切開することができないからである。

このような状況は、過般の第五期第二回全国人民代表大会大会が、社会主義的法制化の諸措置を決定し、「いかなる偉大な革命家といえども法の前には平等である」との近代法の精神に従って絶対的権威者の擅断を絶つべく非毛沢東化を制度化化したこととともに、きわめて注目すべき事実である。

しかし、こうした非毛沢東化の進展は、考えてみると、「四人組」批判それ自身は毛沢東の権威への挑戦でもあることに明らかなように「毛沢東思想」そのもののへの背教であることもいうまでもない。それだけに、この一点において、「四人組」批判を進めつつある今日の中国の指導者として民衆の不安が凝集するのではなからうか。右

告発の書物、艾寒松著「どのようにして共産党員となるか」が改めて紹介され（「光明日報」八月十九日付）注目されている。さらに「人民日報」八月二十一日付の劉立凱論文「レーニンと集団指導」は、レーニンが力説した民主集中制と集団指導制を大きく逸脱した毛沢東体制を明らかに批判したものであった。そして同論文は、「とりわけ重視しなければならぬのは、党と国家の集団指導性が弱まり、破壊されたなら、往々にして党内の野心家、陰謀家が、その機を利用して党権奪取の活動を起し、党と国家を間違った方向にもってゆくことである」と述べて、「四人組」時代の形成の原因を集団指導性の欠如に乗じた党内陰謀

スターリン個人崇拜の誤謬という歴史の先例を目標し、そのことに中国共産党自身かつて自覚的でありながら、それではなぜ、毛沢東崇拜があったかも中国の伝統的な政治文化に調和した信仰であるかのように存在してきたのが解明され得ないからである。

いわゆる毛沢東路線が中国に確立し、毛沢東家長体制が生成しはじめたのは、「スターリン批判」と相前後した五〇年代半ばであった。すなわち五五年後半以後急激な農業集団化からやがて五年の「大躍進」政策に至るプロセスこそ、毛沢東路線の確立過程であったのであるが、このような展開は、政治的・社会的領域における毛沢東の

ビジョンがソ連型モデルに優位するという毛沢東の確信によってもたらされたものであったといえよう。だが、この確信は、「大躍進」政策の挫折によって早くも揺らいでゆく。

しかし、こうした挫折は、毛沢東モデルが中国の社会主義建設の現実に適合した「最適体制」（ティンバーゲン）ではないことへの自覚を促す代わり、かえって毛沢東モデルをイデオロギーとカリスマの権威によって強制する方向へと転じていった。ここに文化大革命に至る中国政治の悲劇の根源があったといわねばならない。そして、毛沢東自身は自らのビジョンと現実との乖離が生み出した政治的・社会的緊張が増大すればするほど、自己の全面的権威を主張することに傾倒したのであった。けっして「四人組」だけの暴走ではなかったのである。そしてこのような毛沢東政治の恣意的な自己完結を許容した組織的機能が中国社会に内在していたことが十分に解明されたとき、今日の非毛沢東化への不安は、はじめて根本的に解消されるのではなからうか。現在は、この点でも過渡期だといえるのである。

「開かれた中国」と非毛沢東化

いずれにせよ、中国はいま「開かれた中国」へ向かってのダイナミックな「離陸」を開始しつつあり、そうした転換の過程を蠕くもっているのである

が、それだけに、中国社会のそうした圧倒的な現実がはらむ矛盾もまた著しく動態的だといわざるを得ない。

「逆流」は不可能

それでは、今日の中国が内包する矛盾の大きさゆえに、中国は再び激動の政治過程を繰り返し、先の「政治幻想小説」が予言したように、右から左へと再び大きく揺れ動くのであろうか。

毛・周なきあとの中国が、あの驚天動地の天安門事件と衝撃的な北京政変（「四人組」失墜）を体験した激動の一九七六年を過ぎて、いまや非毛沢東化を大きく進展させつつある現時点で考え得る中国の将来の展望は、大局的に見た場合、中国の内政・外交の基調が当分の間に再び大きく変動するとは思われないことである。

つまり、文化大革命の挫折以来、「毛沢東体制下の非毛沢東化」を志向してきた周恩来路線なしは脱文革の現実主義的潮流を再び逆流させることは、もはや不可能だと思われることである。それはなぜであらうか。

その最も重要な要因は、今日の中国が置かれている客観的・歴史的な環境であらう。この点では文化大革命以来ほぼ十年間の中国社会の政治的激動のうちに七五年一月に開かれた第四期全国人民代表大会における周恩来政治報告——それは国家的使命観に殉じた周恩来が毛沢東以後の中国を展

望した政治的遺言でもあった——が示した「四つの現代化」を中心とする工業体系、国民経済体系の建設という方向は、そこにいかに多くの困難があろうとも、今日の中国にとって、もはや逆転し得ない社会的・国家的要請であるといえよう。

それだけに中国の国内建設過程に建国後一貫して存在した穏歩と急進のサイクルは、七〇年代前半を決定的な転機として、もはやその循環を繰り返し得なくなったような気がする。このような社会的・国家的要請は、七五年夏の杭州事件に見られた労働者の賃上げ要求がいち早く逆説的に物語っていたところであり、この点で杭州事件は、毛沢東政治への内在的批判であった天安門事件とともに、中国社会の将来を考えるうえで、林彪異変のような一連の政治的事件以上の重要性を潜めていた社会的事件であったといえよう。そして、こうした社会的・国家的要請は、中国の対外関係をより開かれた安定性において求めることへとつながってゆかざるを得ない。過般の中越戦争に見られるように、中国の周辺地域において、いわゆる Chinese World Order（中国的世界秩序観）が脅かされ、中国の国際的威信が大きく損なわれるような場合を例外として、やがて八〇年代の中国は、ソ連を含む大国との間のバランス・オブ・パワーに従来以上の闘志を示しつつ、こうした開かれた国際環境を模索せざるを得ないように思われる。

失墜した「貧困のユートピア」

この点では、今日の中国の対外貿易構造をとってみても、すでに貿易全体の約八五%が日・米・西欧など西側諸国を相手国にする（日本だけで約二五%を占める）という構造的変化を遂げていることにも一応は注目せねばならないが、この点では対ソ貿易が将来再び増大する可能性が常に留保されている。

こうした方向性のなかで中国はやがて、これま



「四人組時代」に比べ、人々の表情も明るくなった PANA

でのような政治指導の密教的性格を徐々に脱却しはじめている。かつてE・フロムは非スターリン化以後のソ連社会におけるイデオロギーの意味と機能を論じながら、「ソ連邦の外交政策を評価する場合に問題となるのは、その社会的・政治的構造であり、もはやイデオロギーではない」（「人間の勝利を求めて——外交政策における虚構と現実——」）と述べていたが、中国もまもなく、イデオロギーよりは社会的・政治的構造がより重要な意味をもつ段階に達するであろう。そして、おそらく実権派ないしは「走資派」と批判された鄧小平型のリーダーたち（彭真、陳雲そして彼らより若い胡耀邦ら）こそ、脱イデオロギーの志向をもつそのような顕教的政治にふさわしいオーソドックスなリアリスト党官僚だとみなすことができるのである。

そして、以上と関連する基本的要因であるが、今日の中国が長期安定的な経済建設、つまり、本格的な工業化をもはやこれ以上遅らせることができないう事情は、中国が外部世界の現実を知らば知るほど切実になる。思えば、中国はこれまで、一つの経済建設方針がわずか五年として貫徹されたことはなかった。革命後の経済復興期は例外としても、「過渡期の総路線」の第一次五カ年計画期、「大躍進」政策によって印象づけられた第二次五カ年計画期、「大躍進」政策挫折後の経済調整期、そして文化大革命の混乱期を経て今日

に至った中国にとって、このような不安定な状況は、もう二度と繰り返すことができないはずである。しかも現在は、一方で中国がいよいよ本格的に国際社会に登場せねばならない時代であり、他方では、「貧困のユートピア」（モラビア）を夢みた毛沢東の「革命」によって、もはや大衆を二度と熱狂させることはできなくなってしまっている。

このようなとき、中国にとって残された道は、本格的な経済建設によって、革命の成果を、イデオロギーや精神によってでなく物質的な豊かさによって保証すること以外にはあり得ない。

こうして中国は今日、そこにいかに困難が多く、またさまざまな曲折が予想されようとも、「四つの現代化」による「開かれた中国」への道を求めて長い道のりを歩んでゆくしかないのである。

毛沢東評価の帰趨

歴史的空白をもたらす

こうして非毛沢東化は「開かれた中国」への志向が続くかぎり必然的なプロセスとならざるを得ないのである。

そこで最後に、将来にわたって毛沢東の歴史的评价がどう位置づけられるのかを展望せざるを得ないのであるが、すでに中国では、壁新聞によつ

て、毛沢東の功績を七分とし、誤りを三分とする表現が見受けられた。しかし、私としてはこの比率を顔面どおりに受けとめる気にはなれない。それはまず第一に、いまや厳しく指弾されつつある毛沢東政治の絶対化の過程が、すでに毛沢東が中国革命に勝利を収めるまでの年月以上の長きに及んでいるからである。中国革命を成就させるに当たって、毛沢東はたしかに偉大な歴史的指導者であった。にもかかわらず、権力を獲得してから今日に至るまでの毛沢東政治のマイナスは、中国にとって、その社会主義建設にとって、ある意味ではとりかえしのつかない歴史の空白をもたらしってしまったともいえるのである。

第二には、まさしく鄧小平自身が最近語っていたように、中国革命にしても毛沢東一人だけでこれを遂行したのでは決してないのである。この鄧小平発言こそ、中国の民衆が待ちのぞんでいた言葉ではなからうか。一連の歴史の書き換えによって、中国革命のあらゆる功績が毛沢東一人に帰せられ、半面、劉少奇、朱徳、林彪、彭徳懐といった中国革命でそれぞれに大きな功績を残した指導者たちは、ことごとく歴史から抹殺されようとしてきた。それだけに毛沢東の功績を相対化しようとする衝動は、おそらく中国革命の全過程にまでさかのぼってなされるであろう。

そして第三に、最近の非毛沢東化のなかでとくに重要な政治的意味をもつ問題は、文化大革命の

端緒となった「新編歴史劇『海瑞罷官』」や「燕山夜話」の再評価に見られるように、彭徳懐の名誉回復がはかられつつあることである。一九五〇年代後半から、人民公社化や「大躍進」政策に対して、真正面から批判を投げかけてきたこの人物は、毛沢東家父長体制の最も初期の批判者であったと言ってもよい。したがって、彼の名誉回復がなされたという事実は、現在の中国政治の動向が、たんに「反文化大革命」の名のもとに文革以降の清算を目指す段階にはとどまらずに、「大躍進」政策を中心とする毛沢東路線そのものを根本的にさかのぼって批判しようとする志向を含んでいることの証明である。

現代の始皇帝はだれか

最後に、いうまでもなく、毛沢東晩年の政治の私物化に対する批判をとりあげなければならぬ。すでに壁新聞では「毛主席は晩年の形而上学および他の種々の原因により、四人組を支持し、鄧小平同志を打倒し、天安門事件の鎮圧を支持した」（自動車修理工作証〇五三八号所有者 一九七八年十一月十九日）との批判がなされたように、この点はある意味で最も批判の容易な側面でもある。「四人組」を蛇蝎のごとくに忌みきらい、批判する以上、その中心であり形成者であった江青はいつたただれの妻であったのか、彼女の政治的な台頭を促したのはいつたただれであったのか

問われることは当然であろう。中国の民衆の間では「四人組」とならんで「五人組」という言葉がひそかに流布されていたように、だれもがそのことを思いつづけていたはずである。

以上を総合的に考えると、毛沢東評価の帰趨は今日の状況とは逆に、当面「功績三分で誤り七分」となるであろう。革命の権力を獲得するまでの毛沢東は偉大であったが、権力獲得後の毛沢東はやがて「現代の始皇帝」と化したという見方こそ、中国民衆のいつわらない毛沢東評価であるようにも思われる。

今日の中国には依然として毛沢東絶対化を志向する「すべて派」が根強く存在しているにもかかわらず、むしろそれゆえにこそ少なくとも「毛沢東批判」に関しては、将来、中国共産党大会の公式の席上で重要な歴史的評価が加えられる日がやがてあるように思われてならない。やはり鄧小平氏は、そのようなハブニングを演出し得る最適人者なのだろうか……。

(なかじま・みねお||東京外国語大学教授)

私はこの療法で腎炎と十二指腸潰瘍を治した!!

ぶどう健康法

●B・シヤクルトン 田中百早氏 9000円

幼時、ビルハルツ住血吸虫に感染、40年の闘病生活の間何度か生死の境をさまよった著者が「ぶどう療法」で奇跡的に回復する。その感動的な治療の記録。

時事通信社